処方番号：89　　**処方名**：滋腎通耳湯（じじんつうじとう）

処方構成：
当帰 2.5-3、川芎 2.5-3、芍薬 2.5-3、知母 2.5-3、地黄 2.5-3、黄柏 2.5-3、白芷 2.5-3、黄芩 22.5-3、柴胡 2.5-3、香附子 2.5-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱な人あるいは高齢者の次の諸症

効能・効果：
聴力低下、耳鳴り、めまい

原典：万病回春
出典：

解説：
腎虚に伴う耳鳴、難聴に適用する。高齢者の耳鳴り、難聴は殆どが腎虚によるものであり、これらに適用の機会が多い

89.滋腎通耳湯

参考文献名		当帰	川芎	芍薬	知母	地黄	乾地黄	黄柏	黄芩	柴胡	白芷	香附子	用法・用量
漢方診療の実際		3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
新版漢方医学		3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
続漢方あれこれ		3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
現代漢方入門	注1	3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
成人病の漢方療法	注2	3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
1000万人の漢方診断と治療の実際	注3	3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
漢方と民間百科	注4	3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	
漢方処方応用の実際	注5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5		3	2.5	2.5	3	2.5	
症候による漢方治療の実際		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5		3	2.5	2.5	3	2.5	
経験漢方処方分量集		3	3	3	3		3	3	3	3	3	3	
漢方薬入門		3	3	3	3		3	3	3	3	3	3	

注1
耳鳴り、難聴

注2
慢性腎炎で萎縮腎のためにおこる耳鳴りに用いる。

注3
老人性の耳なりに用いる。

注4
目標　耳鳴、難聴
応用　中耳炎、老人性難聴。難聴は治りにくく、これで治らなければ、八味丸を用い、それでもなおらなければ、まず絶望的である。

注5
古方で八味丸を用いるような場合で、ことに耳鳴、難聴があるときに用いる。

処方番号：90　　**処方名**：滋腎明目湯（じじんめいもくとう）

処方構成：
当帰 3-4、川芎 3-4、熟地黄 3-4、地黄 3、芍薬 2-3、桔梗 1.5-2、人参 1.5-2、山梔子 1.5-2、黄連 1.5-2、白芷 1.5-2、蔓荊子 1.5-2、菊花 1.5-2、甘草 1.5-2、燈心草 1-1.5

用法・用量：
湯

しぱり：
体力虚弱な人あるいは高齢者の次の諸症

効能・効果：
視力低下、目の疲れ、目の痛み

原典：万病回春
出典：

解説：
浅田の『方函口訣』には腎気明目湯と記載されている。腎虚を認める眼疾患に応用する。眼底（網膜）は漢方的には腎に属すため、眼底の諸疾患に応用の機会が多い。緑内障、老人性白内障などにも適用の機会が多い。眼底出血にも適用機会が多い。

90.滋腎明目湯

参考文献名	当帰	川芎	地黄	乾地黄	熟地黄	芍薬	桔梗	人参	山梔子	黄連	白芷	曼荊子	菊花	甘草	細茶	燈心草	用法・用量
漢方診療医典	3	3		3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
経験漢方処方分量集	3	3		3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
臨床応用漢方処方解説増補改訂 注1	3	3		3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
新版漢方医学	3	3		3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
漢方処方応用の実際 注2	3	3	3			3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
症候による漢方治療の実際	3	3	3			3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
漢方と民間薬百科 注3	3	3	3			3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5		
漢方薬入門 注4	3	3	3*		3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	*生地黄
改訂新版漢方処方集 注5	4	4		4	4	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	

注1
久病で衰弱し、気血衰えて視力障害のあるもの、白内障となったものなどによい。古方では白内障にしばしば八味丸を用いるが、後世方ではこの方を用いる。視力障害・眼精疲労・白内障などに応用する。

注2
・古方の八味丸を用いる場合に準じて、視力が低下したものに用いる。
・精神過労や貧血のため、眼が痛むもの。長年の病気でからだが衰弱して視力が弱り、暗点を生じ、また物をじっとみつめられないもの。

注3
目標　外見上では変化がなくて、視力障害のあるもの。
応用　網膜、硝子体、水晶体などの異常によって起こる視力障害。網膜炎。

注4
白内障　糖尿性、老人性のもので、心身共に疲労し、貧血のため視力が弱っている人。

注5
血少なく眼痛するもの或は久病で気力衰え眼精疲労するもの、或は閃視、或は内障のもの。

処方番号：91　　**処方名**：四物湯（しもつとう）

処方構成：
当帰 3-4、芍薬 3-4、川芎 3-4、地黄 3-4

用法・用量：
（１）散：1 回 1.5-2g　1 日 3 回
（２）湯

しばり：
体力虚弱で、冷え症で皮膚が枯燥、色つやの悪い体質で胃腸障害のないものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経異常、更年期障害、血の道症、冷え症、しもやけ、しみ、貧血、産後あるいは流産後の疲労回復

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
本方は『金匱要略』の芎帰膠艾湯の変方で、それから阿膠・艾葉・甘草の 3 味を去ったものである。婦人の聖薬とせられ、血の道を滑らかにし、通利をつけるが、多くは加減合方して用いられる。四物湯と苓桂朮甘湯を合方したものは、連珠飲と言われ、本間棗軒の経験方で、貧血や出血によって起こる諸症に頻用され、四君子湯を合方した処方は八物湯（八珍湯）と称し、気血ともに虚し、胃腸虚弱で元気がなく、貧血して皮膚枯燥の者に用いられる。
単方としては、月経異常、不妊症、血の道症、産前産後の諸症、冷え症など婦人の諸疾患に応用するほか、しみや乾燥性の皮膚病、しもやけ、下肢運動麻痺、カリエスなどに応用される。

91.四物湯

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	地黄	用法・用量
診療の実際	注1	3	3	3	3	*
処方解説	注2	4	4	4	4	
後世要方解説	注3	4	4	4	4	
明解処方	注4	4	4	4	4	
漢方入門講座	注5	5	5	5	5	
漢方医学	注6	3	3	3	3	
治療の実際	注7	3	3	3	3	
診療医典		3	3	3	3	

*** 通常湯剤として使用されるが、構成生薬は、当帰芍薬散、八味丸など丸散剤として使われているものであるから、散剤としての使用基準が設けられた。**

注1 婦人病の聖薬と称され，血行をよくし，貧血を補い「血の道」と称する婦人科諸疾患に起因する神経症状を鎮静する効能があり，婦人に限らず男子にも用いる。脉は沈んで弱く，腹は軟弱，臍上に動悸がある。多く加減方とする。

注2 原典に一切血虚及び婦人経病を治すとあり，月経異常，血脚気に用い，産後舌爛，産後痿躄，中風，皮膚病，血の道，産前産後諸病，下血に応用。多くは加減合方して用いる。

注3 婦人の諸疾患を治す聖薬とされている。貧血の症があって，皮膚枯燥し，脉は沈んで弱く，腹は軟弱で臍上に動悸を触れるものを目標として，月経の不調があり，自律神経の失調などのあるものに用いる。月経異常，不妊症，血の道症，産前産後諸病（産後の脚弱，産後の舌爛れ，産後血脚気），皮膚病(乾燥性)，痿躄(下肢運動麻痺)，カリエスなどに応用される。

注4 必須目標：①腹部軟弱で臍の上部に動悸がある。②胃弱ではない。適応症：生理不順，血脚気，乾性皮膚病。本方は単独で用いるより，猪苓湯と合方して血尿を治したり，本方を処方に含む連珠飲，温清飲，十全大補湯として用いることが多い。

注5 貧血鬱血による諸症を治す。月経障碍，産前産後の諸病，ヒステリー，血脚気，皮膚病。

注6 特に婦人に用いることが多く，産婦人科的の病気があって，貧血しからだが衰えて艶がないもの。更年期障害，子宮出血その他の婦人科疾患のほか，高血圧症，凍傷，進行性指掌角化症，腎炎に応用する。

注7 本方に黄柏，黄耆，釣藤を加味した七物降下湯（大塚経験方）は虚証で柴胡や大黄が用いられない高血圧症，腎障害をおこし尿中に蛋白などのあるものに用い著効がある。これに杜仲を加えたものを八物降下湯と言う。

処方番号：91A　　**処方名**：芎帰膠艾湯（きゅうききょうがいとう）

処方構成：
川芎 3、甘草 3、艾葉 3、当帰 4-4.5、芍薬 4-4.5、地黄 5-6、阿膠 3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいは虚弱で冷え症で、出血傾向があり胃腸障害のないものの次の諸症

効能・効果：
痔出血、貧血、月経異常・不正出血、皮下出血

原典：金匱要略
出典：

解説：
本方を製するには、処方中の植物性生薬全部を一緒に煎じ、滓を去ったのち、阿膠 3 を加え、再び火にのせ溶解させる。温時服用する。文献には効能として内出血の記載が多いが、一般用ということを考え、「皮下出血」としてある。

91A.芎帰膠艾湯

参考文献名		川芎	甘草	艾葉	当帰	芍薬	地黄	阿膠
処方分量集		3	3	3	4.5	4.5	6	3
診療医典	注1	3	3	3	4.5	4.5	6	3
診療の実際	注2	3	3	3	4.5	4.5	6	3
漢方あれこれ		3	3	3	4.5	4.5	6	3
応用の実際	注3	3	3	3	4	4	5	3
漢方医学	注4	3	3	3	4	4	6	3
現代漢方入門	注5	3	3	3	4	4	6	3
明解処方		3	3	3	4	4	6	3

注1 本方は諸種の出血，特に下半身の出血を止める目的で用いる。うっ血の傾向があって，出血が長びき，貧血の傾向のあるものを目標とする。

注2 産後の子宮出血，痔出血，腸出血，血尿，外傷後の内出血，紫斑病，諸貧血症。

注3 身体下部の諸出血，うっ血があって出血が長びいて貧血状を呈するもの，産後の出血。

注4 子宮出血，痔出血，腸出血，血尿，諸種の貧血症。

注5 子宮出血，血尿，痔疾患，貧血。

処方番号：91B　　**処方名**：加味四物湯（かみしもつとう）

処方構成：
当帰3、川芎3、芍薬3、地黄3、蒼朮3、麦門冬5、人参2-2.5、牛膝2-2.5、黄柏1.5、五味子1.5、黄連1.5、知母1.5、杜仲1.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、血色がすぐれないものの次の諸症

効能・効果：
下肢の筋力低下、神経痛、関節リウマチ、関節痛

原典：医学正伝
出典：勿誤薬室方函

解説：
浅田の『方函口訣』に「諸痿、四肢軟弱、挙動し能わざるを治す。この方は滋血、生津、清湿の三功を兼ねて諸痿を治す。凡そ痿症の初起は「秘方集験」の一方に宜し。若し凝固して動き難き者は痿躄湯を用ゆべし。又筋攣甚だしき者は二角湯を用ゆること有り。若し壊症になり遂に振るわざる者はこの方に宜し。蓋しこの方は大防風湯とは陰陽の別ありて、彼（大防風湯）は専ら下部を主とし、この方（加味四物湯）は専ら上焦の津液を滋おして下部に及ぼす。その手段尤も妙なり。」と記載されている。こじれて難治性の下肢麻痺に適応することが書かれている。下肢の麻痺の他には進行した関節リウマチで身体の衰弱傾向の強い場合に適用する。身体の衰弱傾向を認める関節リウマチには本方の他に大防風湯、舒筋立安散なども用いるが、臨床上これらの三処方の明確な鑑別は困難で、加味四物湯が効かない場合に大防風湯或いは舒筋立安散を考えると云う具合に用いている。

91B.加味四物湯

参考文献名	当帰	川芎	芍薬	地黄	熟地黄	朮	蒼朮	白朮	麦門冬	人参	牛膝	黄柏	五味子	黄連	知母	杜仲	用法・用量
漢方診療医典	3	3	3		3		3		5	2	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
漢方薬入門　注1	3	3	3		3		3		5	2	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
経験・漢方処方分量集	3	3	3		3		3		5	2	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
漢方処方応用の実際　注2	3	3	3	3		3			5	2	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
臨床応用漢方処方解説　注3	3	3	3		3		3		5	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
症候による漢方治療の実際	3	3	3		3	3			5	2	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	
改訂新版漢方処方集　注4	2.5	2	2		8			2.5	2.5	1.5	1	1.5	1	1.5	1	2	

注1
動脈硬化　虚証の人で、貧血があり、手足が冷え、めまい、頭重、耳鳴などがとれず疲労し易いとき。

注2
治りにくい、慢性化した下肢の痛みに用いる。　[応用] 下肢の神経痛、リウマチ、関節痛

注3
この方は血を滋し、津液を清涼ならしめるもので、諸痿症を治する。壊症になってついに手足に麻痺を起こしたものにはこの方がよい。大防風湯はもっぱら下肢を主とし、この方はもっぱら上焦の津液を滋してのち下部に及ぼすものである。脳溢血・脊髄炎・小児麻痺・脊髄癆などに応用される。

注4
目標　諸痿、四肢軟弱、麻痺
応用　麻痺、筋萎縮、脊椎カリエス

処方番号：91C　　**処方名**：七物降下湯（しちもつこうかとう）

処方構成：
当帰 3-4、芍薬 3-4、川芎 3-4、地黄 3-4、釣藤鈎 3-4、黄耆 2-3、黄柏 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいは虚弱で、顔色が悪くて疲れやすく、胃腸障害のないものの次の諸症

効能・効果：
高血圧に伴う随伴症状（のぼせ、肩こり、耳なり、頭重）

原典：修琴堂
出典：

解説：
創方者は大塚敬節。命名者は馬場辰二と言われる。四物湯に黄柏、釣藤、黄耆を加えたもの。したがって四物湯を服用して食欲減少したり、腹痛や下痢をおこすような人には用いられない。虚証の高血圧者で柴胡剤や大黄剤を用いることができず腎障害のあるものにとくによい。

91C.七物降下湯

参考文献名		地黄	当帰	川芎	芍薬	黄柏	釣藤	黄耆
処方分量集	注1	3	3	3	3	2	4	3
診療の実際		–	–	–	–	–	–	–
診療医典	注2	3	3	3	3	2	4	3
症候別治療	注3	3	3	3	3	2	4	3
処方解説	注4	4	4	4	4	2	3	3
後世要方解説		–	–	–	–	–	–	–
漢方百話		–	–	–	–	–	–	–
応用の実際	注5	4	4	4	4	2	3	2
明解処方		–	–	–	–	–	–	–
実用漢方療法		5	5	5	5	2	4	3

注1　これに杜仲3.0を加えて，八物降下湯と称する。

注2　高血圧症で最低血圧が高く，眼底出血が反復し，下肢のしびれ，疲労倦怠，頭痛，衄血，盗汗などを軽快。

注3　高血圧症。

注4　高血圧の虚証で柴胡剤や大黄剤を用いることのできないもの。

注5　虚証ながら胃腸の働きが良い人で血圧亢進，本態性高血圧症，腎性高血圧，慢性腎炎，動脈硬化症。

処方番号：91D　　**処方名**：当帰飲子（とうきいんし）

処方構成：
当帰 5、芍薬 3、川芎 3、蒺梨子 3、防風 3、地黄 4、荊芥 1.5、黄耆 1.5、何首烏 2、甘草 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいは虚弱で冷え症で、皮膚が枯燥するものの次の諸症

効能・効果：
慢性湿疹（分泌物の少ないもの）、かゆみ

原典：済生方
出典：

解説：
本方は四物湯に瘡を治する薬剤荊芥や皮膚瘙痒を治す蒺梨子と皮膚の栄養強壮剤何首烏、黄耆を配伍したものである。

91D.当帰飲子

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	蒺藜子	防風	地黄	荊芥	黄耆	何首烏	甘草
処方分量集		5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
診療医典	注1	5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
応用の実際	注2	5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
大医典		5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
後世要方解説	注3	5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
明解処方		5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1
漢方療法		5	3	3	3	3	4	1.5	1.5	2	1

注1 皮膚瘙痒症，痒疹，その他の皮膚病で膿疱や分泌物が少なく，枯燥と瘙痒を主訴とするものに応用する。

注2 虚証で陰証なので熱状がないが大抵のものが瘙痒を訴え，はなはだしいものは発疹が殆んどなくても瘙痒を訴える。湿疹，蕁麻疹，老人の皮膚瘙痒症，老人の尋常性乾癬，皮膚炎などにも用いる。

注3 老人，虚人などにて皮膚枯燥し，分泌物少なくして瘙痒を主訴とするものに用いてよく奏効する。

処方番号：92　　**処方名**：柿蒂湯（していとう）

処方構成：
丁子 1-1.5、柿蒂 5、ヒネショウガ 4（生姜を使用する場合 1）

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず、広く応用できる

効能・効果：
しゃっくり

原典：済生方
出典：

解説：
虚寒の強まる順に半夏瀉心湯→橘皮竹茹湯→柿蒂湯→丁字柿蒂湯を用いる。

92.柿蒂湯

参考文献名		丁字	柿蒂	生姜
処方分量集		1.5	5	4
後世要方解説	注1	1.5	5	4
診療医典	注2	1.5	5	4
応用の実際	注3	1	5	4
漢方あれこれ		1.5	5	4
現代漢方入門		1.5	5	4
明解処方		記載なし		

注1 この方は胃の虚寒によって吃逆(しゃっくり)を発したものに用いる。

注2 呉茱萸湯や橘皮竹節湯をもちいても効のないものにもちいて効く。

注3 吃逆(しゃっくり)に用いる。橘皮竹節湯などを用いて効のないときによい。浅田宗伯は両方の違いは寒熱の差だといっているが，実際にどう区別してよいのかはっきりしない。

処方番号：93　　**処方名**：炙甘草湯（しゃかんぞうとう）

処方構成：
炙甘草 3-4、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 1-3）、桂枝 3、麻子仁 3、大棗 3-5、人参 2-3、地黄 4-6、麦門冬 6、阿膠 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下で疲れやすく、ときに手足のほてりなどがあるものの次の諸症

効能・効果：
動悸、息切れ、脈のみだれ

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
桂枝去芍薬湯の分量を加減したものに地黄、人参、麦門冬、麻子仁、阿膠を加えた処方である。甘草、大棗が増量されていることに意味がある。動悸の亢進、息切れがあって、体力の衰えたものや、また同時に脈の結滞するものに用いるため復脈湯（ふくみゃくとう）の別名もある。
水 3-35ml に日本酒 14-15ml を加えたもので阿膠以外のものを煮て 120 から 25ml とし、滓を去って、阿膠を加え溶解させて 1 日 3 回に分服する。酒をきらう場合は水で普通のとおり煎じてもよい。一般にはこの煎じ方をしている。ただし重症のものは必ず酒を加えなければならない。胃腸が虚弱で食欲が衰え、下痢の傾向があり、あるいはこの方を飲んで下痢するものには禁忌である。

93.炙甘草湯

参考文献名		炙甘草	甘草	桂枝	麻子仁	大棗	人参	地黄	乾地黄	生地黄	生姜	干姜	ひね生姜	麦門冬	阿膠
処方分量集		3	−	3	3	3	3	6	−	−	3	−	−	6	2
診療の実際		3	−	3	3	3	3	−	−	6	3	−	−	6	2
診療医典	注1	3	−	3	3	3	3	6	−	−	3	−	−	6	2
症候別治療	注2	−	4	3	3	3	3	6	−	−	3	−	−	6	3
処方解説	注3	3	−	3	3	3	3	−	(可)	6 又は	3	−	−	6	2
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方百話		3	−	3	3	3	3	−	−	3	3	−	−	6	2
応用の実際		−	4	3	3	3	3	6	−	−	3	−	−	6	3
明解処方		4	−	3	3	5	2	−	4	−	1	−	−	6	2
漢方処方集		4	−	3	4	7.5	2	−	4	−	−	1	−	5	2
漢方入門講座		4	−	3	3	7.5	2	−	(又は4)	16	−	−	3	5.5	2
古方要方解説	注4*	−	1.2	0.8	1.8	0.8	0.6	−	−	4	0.8	−	−	2.8	0.6
成人病の漢方療法		4	−	3	3	3	3	6	−	−	3	−	−	6	2
基礎と診療		4	−	3	4	7.5	2	−	(又は4)	16	3	−	−	5	2

＊ 1回分量、通常1日2, 3回服用。麻子仁は殻を去るか、砕いて用いるがよい。

注1 心悸亢進と脈の結滞とを目標にして用いるが，脈の結滞のない場合にも用いてよい。本方を用いる患者は栄養が衰え，皮膚が枯燥し，疲労しやすく，手足の煩熱，口乾などがある。

注2 脈の結滞と心悸亢進であるが，結滞がなくても，心悸亢進があれば用いてよい。私はこれをバセドー病や心臓病などで，心悸亢進と脈の結滞のあるものに用いる。

注3 虚証で，栄養衰え，燥きが強く，皮膚枯燥し，疲労しやすく，手足の煩熱，口乾き，大便秘結がちで，息つきが熱く，心悸亢進，あるいは脈の結滞，不整脈と息切れを訴えるのを目標とする。

注4 故に医聖方格にいわく「病人，欬逆，上衝シ，粘痰ニ血ヲ帯ビ，舌上胎無クシテ乾燥シ，心動悸シ，或ハ咽痛シ，或ハ脈結代シ，或ハ心下痞シテ嘔セント欲シ，或ハ疲労スル者ハ，炙甘草湯之ヲ主ドル」と。この説，能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：94　　**処方名**：芍薬甘草湯（しゃくやくかんぞうとう）

処方構成：
芍薬 3-6、甘草 3-6

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず、筋肉の急激な痙攣を伴う痛みのあるものの次の諸症

効能・効果：
こむらがえり、筋肉のけいれん、腹痛、腰痛

原典：傷寒論
出典：

解説：
甘草の量が多いので頓用として用いることが望ましい（１日２-３服）
芍薬と甘草の二味からなる方剤である。骨格筋および平滑筋の攣縮を治す効がある。
原典である『傷寒論』には「脚攣急」を治すと記されている。
『漢方処方解説』（矢数道明）には「本方は発汗過多の後、邪気が内に迫って、筋肉の拘急、腰脚の攣急などを現したとき、この筋肉の攣急や疼痛を緩解させる目的で用いる。四肢の筋肉ばかりでなく、腹直筋をはじめ胃・腸・気管支・胆嚢・尿管などの平滑筋の攣急にも用いられる」と記されている。さらにその応用として「腓腸筋（ふくらはぎ）痙攣・坐骨神経痛・腰痛・キヤリ腰・五十肩・リウマチ・アキレス腱痛・脚気・胃痙攣・腸疝痛・嵌頓ヘルニア・腸閉塞・胆石疝痛・膵臓炎・舌強痛・寝ちがえによる筋肉痛にしばしば用いられ、また排尿痛・痙攣性咳嗽・小児の夜泣き・気管支喘息・痔痛・膀胱痛・歯痛・小児の腹痛などにも広く応用される」と記されており、臨床上参考となる記述である。
『ＥＢＭ漢方』には「種々の原因による腹痛に対する芍薬甘草湯の効果」を検討した多施設症例集積研究（永田勝太郎ら）の報告があり、過敏性腸症候群では有効率 79.3%と記されている。また、「裂肛による内肛門括約筋の痙攣に伴う疼痛に対する軟膏剤単独治療と、軟膏剤と芍薬甘草湯併用治療との比較試験」（遠藤　剛）で全般改善度、有用度ともに有意に優れていたことが報告されている。また、「肝硬変に伴う腓腸筋痙攣に対する芍薬甘草湯の効果：二重盲検ランダム化比較試験」（熊田　卓ら）において有効率 69.2%でプラセボに比較して有意に優れていたことが報告されている。

94.芍薬甘草湯

参考文献名		芍薬	甘草
傷寒論入門	注1	4両	4両
処方集	注2	4	4
応用の実際	注3	3	3
明解処方	注4	3	3
処方解説	注5	6	6
治療の実際	注6	3	3
診療医典	注7	3～5	3～5
民間薬百科	注8	3	3
処方分量集		4～8	4～8
漢方診療のレッスン		6	4

注1 脚攣急を治するが主なれども，腹痛及び脚気にて両足或は膝頭痛み屈伸すべからざるもののその他諸急痛に運用す。

注2 四肢疼痛，痙攣，胃痙攣，腹痛

注3 急激に起こった筋肉の拘攣による症状(痛み)に頓用として用いる。腹証は，両側の腹直筋が攣急していることが多いが，これのないこともある。

四肢の疼痛，胆石や腎石の疝痛発作，胃腸痙攣，神経痛などに頓服，排尿痛の激しい場合，小児の夜泣きなどに応用される。

注4 直腹筋の攣急，足温い。四肢(とくに脚)筋肉の攣急，腹痛，排尿痛を目標とする。

膝蓋痛，腹痛，胆石症，排尿痛，乳児の腹痛による夜泣き，急性疼痛などに応用される。

注5 発汗過多の後，邪気が内に迫って，筋肉の拘急，腰脚の攣急等を現らしたとき，この攣急や疼痛を緩解させる目的で頓服として用いる。

腓腸筋痙攣，坐骨神経痛，腰痛，キヤリ腰，五十肩，筋肉リウマチ，アキレス腱痛，脚気，胃けいれん，腸疝痛，嵌頓ヘルニア，腸閉塞，胆石疝痛，腎石疝痛，肝臓炎，舌強直，寝ちがえ，排尿痛，けいれん性咳嗽，小児夜泣き，気管支喘息，痔痛，膀胱痛，歯痛，小児腹痛などに応用される。

注6 はげしい腹痛発作に頓服として用いる。その目標は腹直筋の拘急にあり，このさい疼痛が手，足にまで及んで，ひきつれることがある。多くは他薬，例えば大柴胡湯，大黄附子湯，桂枝加芍薬大黄湯などに兼用として用いる。

注7 急迫性の筋肉の攣急に頓服として用いる。四肢の疼痛，腎石・胆石などの疝痛発作に応用される。

注8 突然に筋肉がひきつれて痛むものを目標とし，激しい運動のあとで，手足がひきつれて痛むもの。胆石，腎石による激しい腹痛，乳幼児の夜泣き，月経困難症の激痛などに応用される。